

花咲爺さん

附屬幼稚園 小 園

幼稚園で致して居りますあのお遊戯を、こんな風にして

みたら、あの子供達の一人々々に本當によろこばれるものが出来るのではないかと、或時ふと思ひつきまして、あの古くからよく知られて居ります花咲爺のお唱歌に、お遊戯さいふ程でもない一寸したものを考へてみましたところ、

大さうごの子供にもよろこばれるものが出来ました。あの子供達は、一人は象に、一人は犬になる、さいふ様にして、それ／＼異つた個々の動作をなす事を、大さうよろこぶ様で御座います。この花咲爺さんも、犬になる人、白になる人、さいふ様に役を定められる事を非常によろこびました。その上にも一ツ、一人づ／＼にお面を作らせて、それをつけましたところ、私は大判だ、さいふ事がなを一層はつきり意識されて参りました大よろこびでした。このお面をつけてお遊戯をするさいふ事は大さうご

の子供にもよろこばれた事で御座います。

お面は、顔のかくれぬ程度に、顔の上の方につける様に、紙は白のボール紙或は畫用紙の厚いものを用ひ、それ／＼自分でかゝせました、こめるには幅のやゝ廣いゴムひもを用ひました。お爺さん二ツ、白一ツ、犬一ツ、大判、小判、櫻の花、瓦、瀬戸かけ等は夫々必要の數だけ作ります。

人數は、組全體の子供が一しよに出来るので御座います、爺さん二人、犬、白、の他は全部を二ツのグループに分けて、一方を瓦瀬戸かけの組、一方を大判小判櫻の花の組、と致します。

1、瓦瀬戸かけの組

人數は八人以上十人位まで、一重の圓形にしておきます、これはあまり目立たない様な氣がするの、子供

も羨まりこの組になる事を好みませんので、さかく平常は目立ち過ぎてゐる、女兒がこの役には適當かま存じます。

2、大判小判櫻の花の組

十五六人以上を適當に致しますが、人数の都合でこのグループは何人でも、たゞ二重の圓形の作れる程度でしたら出來ます、櫻の花を適當の場所に點々ま入れておき、内側と外側の人数の差を程よくして二重圓を作つておきます。

3、爺(1)、爺(2)、犬、白

これは夫々一人づゝ役をきめて、圖の様な場所に並んで居ります。

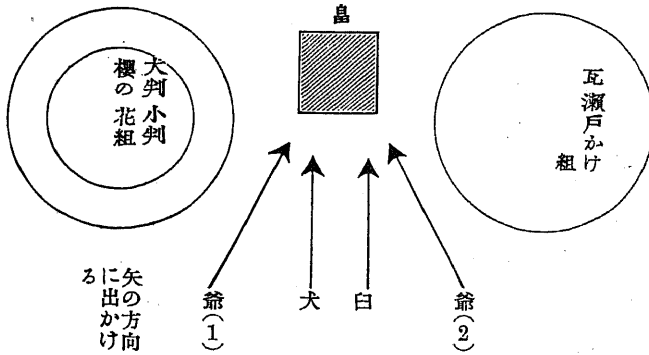
次に動作の一つ一つについて申述べます。

一、

○裏のはたけでボチがなく、

犬、裏のはたけで、——スキップにて圖の矢の方向に鳥の邊まで出る。

ボチがなく、——右手にて鳥の所を指す、(軽く上下に手を振り乍ら)



ある、

○正直爺さん掘つたれば、

犬、爺(1)、

爺(1)右手にて杖を持ち、左手を後にまはし腰をまげて杖をつき乍ら、ゆつくりボチの後について歩き鳥の所でまゐる。

爺(2)及び白はその場に腰をおろしてある、

大判小判櫻の組、瓦瀬戸かけ組、その場にて、圓の中心に向つたまゝ皆手をつないで座つて

鳥の場所にて躑にて掘る様子を、

他の組は皆前と同じに座つてゐる。

○大判小判がざくざくざつくと、

犬、爺(一)

大判小判が、までその場にて拍手(八つ)ざくざくざつとくざくまででスキップにて前の場所に歸る、

大判小判櫻の花の組

二重圓を作り手をつなぎ中心に向つて座してゐるのを、

大判、——内側の圓揃つて手をつないだまゝ立ち、外

側はそのまゝ座つてゐる、

小判が、——外側の圓は手を取つたまゝにて立ち内側

は座る、

ざく、——内側が立ち、外側は座る、

ざく、——外側が立ち、内側が座る、

ざつと、——内側が立ち、外側が座る、

ざく、——外側が立ち、内側が座る、

右の様に互に固く手を握つたまゝ、す早く立つたり、

座つたりする、

瓦瀬戸かけ組、白、爺(二)は前と同じく座つてゐる。

二、

○いぢはる爺さんボチかりて、

爺(二) 前節の爺(一)と同じ様に杖をつき乍ら鳥の所に出る。

犬、爺さんの後についてゆつくりしたスキップにて鳥に

ゆく、

其他の組は皆前と同じに座つてゐる、

○裏の鳥をほつたれば、

犬、爺(二) 一しよに躑にて掘る様子を、他の組は

皆前と同じに座つてゐる。

○瓦や瀬戸かけがらがらから、

犬、爺(二) 前の場所に鳥から歸る。

瓦瀬戸かけ組、八人が圓の中心に向つて座つてゐるの

を、カ、ハ、ラ、ヤ、セ、ト、カ、ケ、ミ夫々一人が

一字づゝの割合にて、順々にす早く一人づゝ立つ、こ

れは八人以上になつた場合には適宜に二人一しよに立つ、そして全部立つ、

がらがらがら、——各々自分の周圍を手を打ち乍らまはる、

其他の組は前と同じくその場所にて座つてゐる。

三、

○正直ぢいさん白ほつて、

白、ぎしん／＼とゆつくり前に歩いて出る、

爺(一) 腰をまげ杖をつき乍ら白をつれて前に出る、

○それでもちをついたれば、

白、兩手にて體の前に大きく白の形を作る、

爺(一) 杵をふり上げ餅をつく様子をする、

其他の組は座つてゐる、

○又ぞろ小判がざくざくざくつく、

爺1、白、拍手八回の後スキップにて歸る、

大判小判櫻の花の組、第一節の動作と同じ内側と外側が交互に立つたり座つたりする。

其他は座つてゐる。

四、

○いちはる爺さん白かりて、

爺2、白、前節の爺(一)と同じく白をつれて前に出る、

白はぎしん／＼と前に出る、

他はやはり座つてゐる、

○それでもちをついたれば

爺(2) 餅をつく、白は第三節の場合と同じく兩手にて

白の形を作る。

其他の組は座つてゐる。

○又ぞろ瓦がらがらがら、

瓦瀬戸かけ組、第二節の瓦や瀬戸かけがらがらがら

の場合と同じく、一人づゝ順々に立ち、がらがらがら

がらにて各々手を打ち乍ら自分の周圍をまはる、

爺2、白、スキップにて元の場所に戻る、

其他の組は座つてゐる、

五、

○正直爺さん灰まげば

爺(一) 腰をかゞめ二三歩前に出てから、櫻の花の組の

方に向いて、左手にかゝへたかごの中の灰を右手にて

まく様子を二三度する、

其他の組は全部まだ座つてゐる、

○花が咲いたかれ枝に、

爺(1) まだ灰をまいてゐる、

大判小判櫻の花の組、このグループの中の櫻の花だけ一人或は二人位づゝ順々に立ち、他の大判小判は座つたまゝでゐる、

其他の組はまだ座つたまゝでゐる、

○ぼうびは澤山おくらに一ぱい、

爺(1)、爺(2)、白、犬、四人手をつなぎ元氣に右廻りに歩く、

大判小判櫻の花の組、これも皆立つて元氣に右廻りに歩く、

瓦瀬戸かけの組、これも他の組と同じく皆立つて元氣に右廻りに歩く。

尙唱歌は第六節まで御座いますがこれを省き、第五節でこのお遊戯をめだたしめでたしと致しました、

以上は皆で歌をうたひ乍ら致します、そして規則めいた事、例へば右足から出るさか、何歩歩くさかいふ様な事は全く考へずに、子供のなすがまゝに致しました。本當につまらないもので御座いますが、何かの御参考にもなれば幸ひ存じます。

(四三頁ヨリ)
格的に人間の萌芽たる幼児の母たり得るの資質を體得する

に至るのではあるまいか。斯く考へ來つて始めの言葉に歸する時、母たる資質の中にてフレーベルが特に吾人に啓示する所は即ち『其兒童の助によつて自分の欠陥を補ふ』といふ態度であると思はれる。かの「子供から學べ」なる常套語はこゝに女性と幼児との本質的關係に立脚したる嚴肅深き意義を以て吾人に啓示せらるゝに至つたのである。

フレーベルのこの言葉に就て小生は更に小原先生の譯書(一〇三頁)及英譯書を参照したところ、多少その意味を異にするを見出したので、更に京都帝大の岩井先生にドイツ語の原書に就てお尋ねしたのである。そこでこの稿は一まづ此處にて打切り、次號に於て諸賢と俱に詳細に忠實にフレーベル先生の眞意の存する所を研究して行きたいと思ふ。斯かる研究は淺學なる小生一人の能ふ限りではないので、此方面に就てかねてより深甚なる關心を以て研究せられつゝある諸先覺の先生方より來月號の本誌に御高見を寄せられむことを切望する次第である。

(昭和九年四月二十六日車中にて第一稿摺筆大阪驛上り列車
便投函)